

2009 年度 事業報告書

財団法人 C.W.ニコル・アフアの森財団

目次

目次.....	- 1 -
はじめに.....	- 2 -
1 組織.....	- 3 -
(ア) 会員状況.....	- 3 -
(イ) 役員等（敬称略・順不同）.....	- 3 -
2 会議.....	- 4 -
(ア) 理事会.....	- 4 -
(イ) 評議員会.....	- 4 -
(ウ) 森林維持管理整備.....	- 5 -
植 樹.....	- 10 -
ヤブ刈り.....	- 11 -
水辺の護岸整備.....	- 12 -
整理伐（カラマツ林）.....	- 14 -
(エ) 自然環境調査.....	- 15 -
地形図整備.....	- 15 -
「北エリア」での生物の様子.....	- 18 -
「北エリア」と「南エリア」との比較.....	- 20 -
雑感・その他.....	- 21 -
評価（生き物の視点から見た、アフアの森と整備作業）.....	- 22 -
周辺地域におけるアフアの森の生態学的位置付け.....	- 23 -
(オ) 人材育成事業.....	- 24 -
(カ) トラスト活動.....	- 25 -
(キ) 心の再生事業.....	- 26 -
(ク) 国際交流事業.....	- 26 -
(ケ) 普及交流事業.....	- 27 -
(コ) その他の事業.....	- 29 -
おわりに.....	- 31 -

はじめに

財団法人 C.W.ニコル・アフアの森財団は 2009 年 5 月 31 日で設立丸 8 年を迎えました。特に本年度は神奈川県麻布大学と、アフアの森の再生をより学術的な視点で評価し、また教育の場としても活動することを目的に学术交流協定を結びました。長年に渡る地道な森の再生活動を、評価していただいた結果と受け止めております。

アフアの森財団の活動は、荒廃した日本の森を再生することを目的に、現理事長である C・W ニコルが 1986 年より飯縄山麓に位置する 30 年以上放置された里山（長野県上水内郡信濃町）を少しずつ買い取りはじめたことが始まりです。その第一歩はわずか 0.2 ヘクタールほどの土地からでした。その後 17 年間少しずつ買い取り、2002 年の財団設立時には約 9.6 ヘクタールとなりました。

現在では、多くの方のご協力により設立当初の 3 倍である約 29.7 ヘクタールの土地において森の再生活動が広がるにいたりました。また、「トラスト」、「森林整備」、「調査研究」の森の再生に関わる活動に加え、豊かになりつつあるアフアの森を「利用する（活かす）活動」を実施するに至っております。

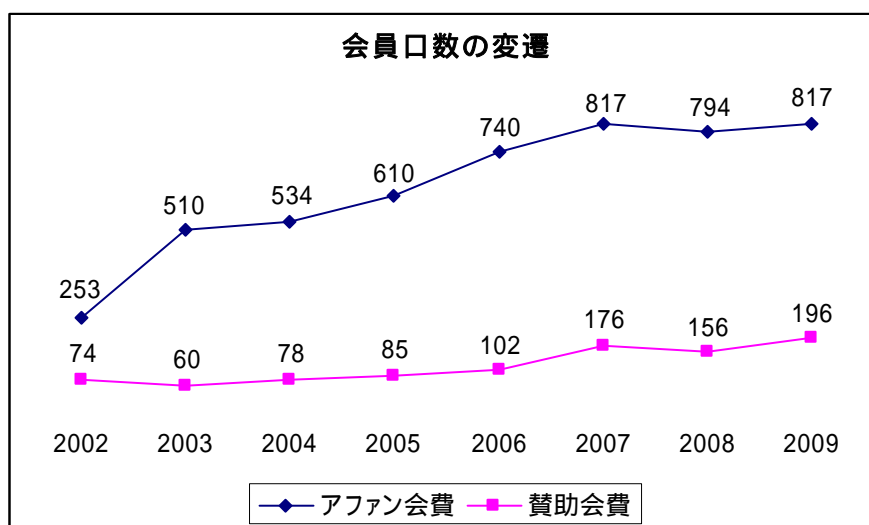
ここまで財団が成長できましたのも、皆様の変わらぬご支援の賜物と実感しております。この場をお借りしまして、あらためて御礼申し上げます。

この報告書は、2009 年度の活動についての概況をまとめ、お伝えするものです。

1 組織

(ア) 会員状況

	口数	金額
賛助会員	196 口	9,800,000 円
アフアン会員	817 口	4,085,000 円



(イ) 役員等 (敬称略・順不同)

理事・幹事・評議員

理事長 C.W. ニコル
 専務理事 森田 いづみ
 常務理事 松木 信義
 理 事 大槻 幸一郎
 金子 与止男
 谷 達雄
 野口 理佐子
 高見 裕一
 林 秀剛
 山瀬 一裕
 アリスター・ドライバー

評議員 梅崎 義人
 大熊 孝
 関口 鉄夫
 瀬田 信哉
 武田 徹
 茅野 實
 星野 佳路
 前河 正昭
 前田 利彦
 横谷 幸
 狩野 土

監 事 畠田 洋平
 吉田 寛

2 会議

(ア)理事会

日時	2009年5月21日(木) 13:30~15:20
出席者数	理事総数11名 幹事2名 出席者数12名(内委任状2名)
審議事項	任期満了に伴う役員・評議員再任について 2008年度事業報告(案)について 2008年度会計報告(案)について 2009年度事業計画(案)について 2009年度収支予算(案)について その他 アファンセンターについて(報告) 新公益法人について 事業連動寄付について(報告) 信濃町産廃対策住民の会 請願書連署の依頼について ロゴマークについて

(イ)評議員会

日時	2009年5月21日(木) 15:30~17:00
出席者数	評議員総数10名 出席者数10名(内委任状4名)
審議事項	2009年度事業計画(案)について 2009年度収支予算(案)について その他 アファンセンターについて(報告) 新公益法人について 事業連動寄付について(報告) 信濃町産廃対策住民の会 請願書連署の依頼について ロゴマークについて

3 各事業報告

(ウ) 森林維持管理整備

本年度の森林整備内容は、これまで整備を行ってきた場所へ「植樹」から「伐採」までの造林施行が中心となりました。また、「南エリア」(2008年度トラスト地)では、隣接地との境界のヤブ刈り作業を行ないました。

以下に、主な活動内容を示します。

南エリアでの本格的な整備作業は行っておりません。まず、整備前の状況を把握・記録することを優先し生物等の調査活動を行っております。今後、整備活動と生き物との関連性や整備活動の評価を生き物の視点から示したいと考えております。

3 各事業報告

表: 主な森林維持管理作業内容(2009年度) (1/2)

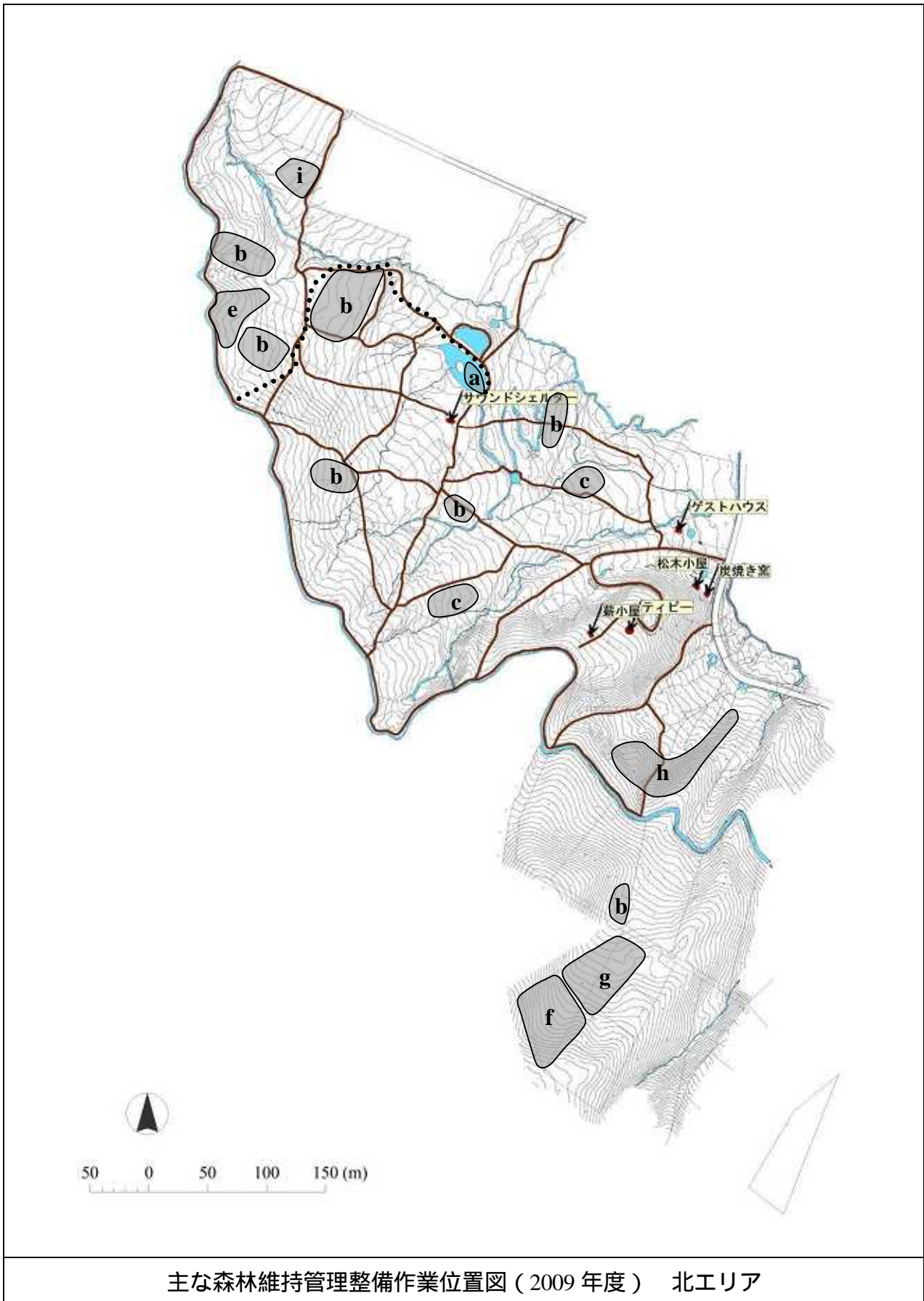
施行内容	主な位置	作業内容	施行時期(月)											
			4	5	6	7	8	9	10	11	12			
幼木手入れ	全域	雪圧により折れてしまった幼樹に添え木をし、紐で縛り、生育の補助を行った。	下											
雪起こし	全域	雪圧により倒伏した幼齢木を起こして木が通直に育つための補助を行った。	下											
弥生池の護岸整備	a	弥生池の一部で、粗朶(細い木の枝を束状にしたもの)を使った護岸整備を試験的に行なった。	下											
植栽 1	b	地元森林組合から購入した苗木 4 種 370 本の植樹及び食害や雪害により枯れてしまった場所へ実生苗約 260 本の移植作業を行なった。作業はボランティアの方々にご協力いただいた。	下	中										
チップ敷き	踏圧から土壌を守るため、人が多く入る場所を中心に前年の伐採木をチップにしたものを敷いた。作業はボランティアの方々にもご協力いただいた。		上										
間伐	c	杉を中心に形質不良木を主体に伐採を行った。		下										
下草刈り	全域	植栽木及び稚樹の成長を助け、形質劣化を防ぐために、下草刈りを行った。		下	全	全	全	上						
ヤブ刈り ツル切り	--- d	新しいトラスト地の外周及びアクセス路のヤブ刈りを行なった。また、一部ツル切りを行なった。			下									
ヤブ刈り 2	e	整理伐実施のためのヤブ刈りを行なった					中							
整理伐 1	e	枯死や幹折れ、形質劣化をしているものを中心に伐採を行った。						中	下					
ヤブ刈り 3	f g	整理伐実施のためカラマツ林の林床のヤブ刈りを行なった。								上				

3 各事業報告

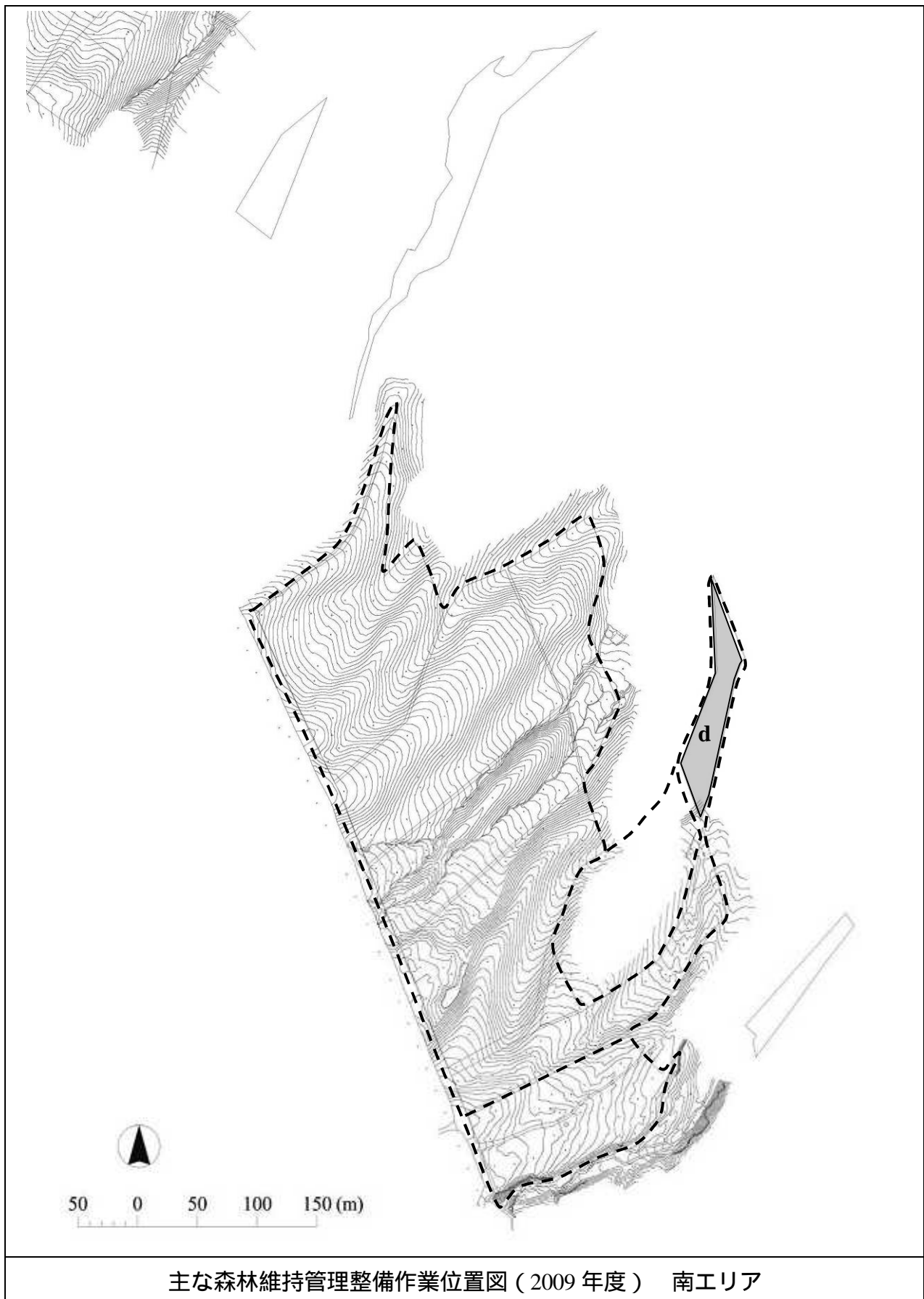
表: 主な森林維持管理作業内容(2009年度) (2/2)

施行内容	主な位置	作業内容	施行時期(月)										
			4	5	6	7	8	9	10	11	12		
植栽2	h	食害や雪害により枯れてしまった2008年植栽地への約100本の補植を行った。									中		
整理伐2	g	カラマツ林の形質不良木の伐採を行った。									上 中		
集材	g	伐採したカラマツの集材を行った。										中 下	
萱刈り	i	萱場の刈り払い作業を行った。作業はボランティアの方々にもご協力いただいた。										中	
高枝切り	全域	植栽木にマイナス影響を与える枝の除去を行った。											上

3 各事業報告



3 各事業報告



3 各事業報告

植 樹

ネズミによる苗木の食害多し

今年度は植栽木の根がかじられるネズミによる食害が非常に多く、植栽後4年経過したものでが被害に遭い、過去にない数の植栽木が枯れてしまいました。被害地へは約360本の苗木を補植しましたが、すべての被害を補えるものではありませんでした。(下写真)



食害地への補植と合わせて730本を植樹

前年度に整理伐を行なった場所、および食害や雪害により枯死した場所へ、合わせて約730本の苗木を植栽しました。(p.7 地図 b、h)

整理伐下エリアへ植える樹種の選定には、緩やかな傾斜地であり土壌水分の多少が場所によって違うこと、また伐採した樹種がどのような土壌を好むものであったかがポイントとなりました。検討の結果、

- ・比較的土壌水分の少ない場所へはブナ・コナラ
- ・土壌水分の多い場所へはカツラ

を、植栽しました。

食害や雪害のあったエリアへはコナラを植栽しました。地元の森林組合から購入した苗木だけではなく、アファンの森内の実生苗も移植しました。また、2006年植栽地(p.7 地図 地図 h)へは、植栽したアオダモの生長が良かったため、食害にあったコナラについては一部樹種を行い、アオダモ(購入苗)を植栽しました。

3 各事業報告

ヤブ刈り

「南エリア」の外周とアクセス道を明確に

2009年2月にトラストが完了した「南エリア」約12haの山林について、隣接地との境界をあきらかにするためにヤブ刈り作業を行ないました。また、公図上は公道が存在するものの長い間放置されてきた場所であり、現状ではほとんどがヤブに覆われてしまって不明である場所も多いため、アクセス道のヤブ刈り作業も数箇所行ないました。



3 各事業報告

水辺の護岸整備

弥生池を粗朶(そだ)で護岸

2008年秋に、水質や底質浄化、底泥の堆積状況を確認、さらには単一になりつつある水辺環境にかく乱を与えること、を期待して弥生池のかいぼり作業を行いました。その後もより効果を得るために2009年の春先まで水を張らず「池干し」を行ないました。(p.7 地図a)

岸辺が削られている場所も多く見られ、岸の形状改修等を実施することの必要性については、水生生物の調査結果からも指摘されています。(「浅瀬のない単調な岸形状」と「水生植生については変化がない」ことは、生物多様性と水質維持機能の向上を見据える上で見逃せない事項である。)

今回は水中生物の生息環境創出も視野に入れ、試験的に粗朶を使った約7メートルの護岸整備を行ないました。粗朶と粗朶を固定する杭には、水辺でも腐らずに根付くヤナギやハンノキを主に使用しました。(次ページ写真)

弥生池は造成から17年が経過しています。かつてはニコルが泳いだことがありましたが、近年は一年中水が濁っています。今回のかいぼりでは、若干の水質、底質の向上は認められたものの、底泥の堆積量が多く、かいぼりの効果を考えるほど十分な作業は実施できませんでした。しかし、底泥の堆積状況やかかる作業労力、泥上げポンプの効率など、実施してみて始めたわかったことも多く、今後本格的にかいぼりを実施するには、重機やバキュームカーの利用を検討する必要があることも分かりました。

3 各事業報告

	
<p>(1) ハンノキで作った杭を打ち、 枝を編んでいきます。</p>	<p>(2) 枝は交互に絡めるように。</p>
	
<p>(3) 粗朶組みの完成です。</p>	<p>(4) 粗朶の中に、 バケツリレーで泥を入れます</p>
	
<p>(5) 終了です。</p>	<p>(6) 水張り後、 粗朶のヤナギから芽が出てきました</p>

3 各事業報告

整理伐（カラマツ林）

放置されてきたカラマツ林を伐採

この場所は2006年にトラストが完了しているカラマツ植林地ですが、植林後に間伐が施されず放置されたため、密生し、立ち枯れや形質不良木が目立つ林分でした。現状から間伐を行っても生長は期待できず、風倒被害も予想されることから、樹種転換をすることにしました。今年度は形質優良木のみを残しての伐採を行いました。

伐採した材は集材機を使って集材を行い、来年度この材をウッドチップにして作業道に敷く予定です。



3 各事業報告

(工)自然環境調査

多様性を分かりやすく示す手法の検討を始める

昨年度の「南エリア」取得に伴い、今年度より特に生物多様性についての評価と、今後の整備作業に活かすことを意図した活動に発展させています。

2011年度の終わりまでに、生物多様性の評価手法（調査内容、データの分析方法、評価方法）として、複数の分類群を扱い、かつ地域住民にもわかりやすい手法を整備し、評価を数値等で示すことを目標に取り組み始めました。

南北エリアを比較し、管理の有無を生き物の視点から示す方針へ

「南エリア」は、「北エリア」と同じ斜面の南側数百メートルに位置し、人の手で継続的に管理されていない山林である。そこで、南北各エリアで同様の調査を実施することで、「**管理されている環境**」と「**管理されていない環境**」の違いを生き物の視点から示す「比較調査エリア」として「南エリア」を位置付けました。

本年度は、南北エリアの比較を念頭に置いて現地調査を実施すること、また、各調査仕様の検討・整備に主眼を置いた一年として活動しました。

今年度実施した調査および作業項目を一覧に示しました。ここでは調査結果の概要と考察できる事項を記します。（表 1-a、1-b）

地形図整備

南エリアの地形図を作製

南エリアの地形情報を把握し、調査データを記録する土台とするために、測量及び地形図の作製を行いました。

3 各事業報告

表 2-a 2008 年度自然環境調査項目（地図、植物）

分類	調査項目	実施時期	概要
地図	南エリアの測量（継続調査）	4月 ～5月	南エリアの測量と地形図の改訂を行った。
	20m メッシュの目印付け作業	中止	ハンディ GPS 受信機を利用して、記録をすることとした。
植物	南エリアの植生状況予備調査（新規調査）	4月 ～7月	南エリアの植物の状況を把握するために踏査した。
	植物相の追加（継続調査）	4月 ～7月	全域で確認できた植物種のリストを改訂した。
	春植物調査（継続調査）	5月	春先に林床に咲く植物種を、踏査して地図上に記録した。
	植樹苗計測（継続調査）	9月	2004年5月に植樹した苗木の地際直径、樹高を計測した。
	堅果類生産量計測（継続調査）	9月 ～11月	シードトラップを設置し、計測した。
	希少及び資源樹木計測（継続調査）	9月	胸高直径及び幹周を計測した。
	常設区樹木計測（継続調査）	9月	立木の胸高直径を計測した。

3 各事業報告

表 2-b 2008 年度自然環境調査項目（動物、その他）

動物	鳥類相調査（継続調査）	通年	アファンの森で鳥類種を記録し、リストアップを行った。
	鳥類行動・利用環境調査（新規調査）	通年	特に鳥類の行動や利用環境の記録を行った。
	フクロウ営巣調査（継続調査）	3月 ～	フクロウの営巣状況を確認した。
	猛禽類繁殖調査（新規調査）	3月 ～5月	猛禽類の繁殖状況を確認し、営巣木の把握をした。
	ヤマネ巣箱調査（継続調査）	4月 ～12月	巣箱を設置し、利用度を調べた。
	一般鳥類巣箱調査（継続調査）	5月 ～6月	常設の巣箱の利用状況を確認した。
	クモ類相予備調査（新規調査）	7月、 8月	クモ類を見つけ取り、リストアップした。
	コウモリ巣箱調査（継続調査）	7月 ～11月	巣箱を設置し、利用度を調べた。
	水生生物調査（継続調査）	7月、 11月	2004年に造成した水路および周辺地域で水生生物の状況を調べた。
	陸産貝類予備調査（新規調査）	9月	陸産貝類を採取し、大まかな陸産貝類相を把握した。
	定点観測（継続調査）	通年	自動撮影カメラによる観察。
他	弥生池のかいぼりに伴う水質調査（新規調査）	08年11月 ～6月	かいぼり・護岸作業の前後で簡易的な水質調査を実施した。
	気象観測（継続調査）	通年	気象観測装置を設置し、気温、湿度のデータを蓄積した。
	GISアプリケーションの運用	通年	地形図や各調査データを入力し、まとめや分析等に役立てる。

3 各事業報告

「北エリア」での生物の様子

植物の総確認種は502種に

「北エリア」の植物相リストに新たに9種を追加しました。これで現在「北エリア」(面積:約18ha)で確認されている植物(維管束植物)種数は113科502種(長野県レッドデータブック掲載種は11種(自生種7種))となりました。

本年度新たに確認された5種のうち、長野県レッドデータブックに記載されているラン科の「ナツエビネ(*Calanthe reflexa*)」(絶滅危惧 A 類(CR))が確認されました。(右写真)

(参考)皇居吹上御苑で確認されている維管束植物種数は122科427種¹。

南エリアの植物相については、予備調査中です。



ナツエビネ

植樹5年後には43%が淘汰されていた

2004年5月に植樹した苗木の生長度合いを調査したところ、5年間成長し続けている苗木は292本で、植樹本数516本の約57%であることが分かりました。この5年間生長をつづけている中では、特にケヤキが多種に比べ大きく育っており(幹の太さは平均して10倍以上、樹高は4倍以上)、一方でキハダは他種に比べ生育状況はよくありませんでした。

コナラ、ミズナラについて、移植した苗木と購入した苗木との間に、生育状況、生長度合いについて大きな差は見られませんでした。今後もモニタリングを続けてまいります。

¹ 近田文弘・秋山忍・門田裕一, 2000. 皇居吹上御苑の維管束植物. 国立科学博物館専報 34:7-43

3 各事業報告

巣箱とシラカバ樹洞の2箇所でフクロウが繁殖

昨年度に引き続き、「北エリア」の巣箱とシラカバの樹洞の2箇所でフクロウの繁殖が確認できました。巣箱では2羽が巣立ちましたが、シラカバ樹洞では抱卵までは確認しましたが何らかの原因で巣立ちには至りませんでした。

財団設立の2002年以降8年間で、6シーズンの繁殖、合計14羽のヒナの巣立ちを確認したことになります。アファンの森には、休息できる適度な空間のある森林、繁殖に適した樹洞、ネズミ類が豊富に生息する環境が整っていることの表れと考えています。

巣箱に設置しているCCDカメラでのモニタリングは、ケーブルが断線し、修理中に繁殖が始まったので断念しました。

水辺環境は13パターンの環境が維持されている

水生生物の調査では、トンボ類の確認種数が9科37種に増え（2008年は9科27種、10種増）、調査開始から4年目に至っても確認種数が増えています。

トンボ類は、生活サイクルの中で水域と陸域の両方を必要とし、種によって大きく生態が異なり、さらに好む生息場所・繁殖場所も異なることが知られています。今回の調査結果から、大きく分けても13パターンの多様な水辺・湿地環境が、昨年までに引き続きアファンの森に維持されていることが分かりました。

希少な陸貝（カタツムリの仲間）を確認

陸産貝類の調査では、マツシマクチミゾガイ (*Eostrobilops nipponic*) が確認されました。この種は、低山や里山に生息する日本固有種で、知られている生息地が30に満たない非常に希な貝類です。

この種は、長野県レッドデータブックでは「絶滅危惧 類 (CR+EN)」として、また環境省のレッドデータブックでは「絶滅危惧 類 (VU)」として掲載されています。これはクマタカやメダカと同様の希少性です。

3 各事業報告

「北エリア」と「南エリア」との比較

「南エリア」を比較調査地として設定し調査を始めています。本年度は調査仕様の検討・整備に主眼を置いているため本格的な比較には至っていませんが、分かったことを記します。

両エリアで猛禽類の繁殖を確認

両エリアでノスリの繁殖を確認しました。「南エリア」では数年使われているものと思われ、「北エリア」ではツル植物の除去などの整備活動により、樹冠部の巣へ出入りする空間が確保されたと思われます。

「南エリア」はヤブを好む鳥が、「北エリア」では地上採餌する鳥が、それぞれ多い

鳥類の調査から、「南エリア」では藪を好む種（ヤブサメ、他）が北エリアに比べて多く確認され、「北エリア」では地上採餌する種（ホオジロ、アカハラ、他）が南エリアに比べて多く確認された。

鳥の視点から見ると、南エリアには藪が多く、北エリアは林床が藪に覆われていない、ということがうかがえそうです。

環境の多様度に差がある（南エリアは単調な環境）

クモ類の予備調査では、「北エリア」で22科106種、「南エリア」で17科44種が確認されました。この差が出た理由は、「調査の量」によるものと「環境の多様度の違い」によるもの、この両方の理由が当てはまると言えます。

また、陸産貝類の予備調査は、「北エリア」で27種が確認されましたが、「南エリア」では8種と少なく、この要因として、「南エリア」は放置され環境が単調であることが考えられます。

3 各事業報告

雑感・その他

ツキノワグマ、イノシシ、シカの出没が多かった

整備作業、調査者が現地での活動を行う中で、ツキノワグマ、イノシシ、シカの出没が多かった印象を持っています。

「南エリア」では、ツキノワグマの目視確認は3回あり、これまでツキノワグマが多く行き来していた場所であることがうかがえます。

「北エリア」ではツキノワグマの目視が1回、イノシシの目視が数回、さらにシカの痕跡が多くありました。

3 各事業報告

評価（生き物の視点から見た、アフンの森と整備作業）

本年度の調査結果から、現在のアフンの森「北エリア」について、また、整備作業について評価できることとして次の事項を挙げます。

『適度な林内空間がある明るい森である』

【鳥類】林内空間が広い森を好み、昭和 40 年代の都市周辺の里山で普通に生息していたサンショウクイとコサメビタキが確認されている。

【クモ類】開けた明るい環境と低木やヤブがセットとなっている環境で観られる種が確認された。

『まめに手入れされている森で、小さな環境が多様に揃っている』

【クモ類】「(微細な)環境のパターン」と「クモ類の種数」は密接な関係があると思われる、南エリアとの確認種数に 2 倍以上の差があったことは、北エリアに多様な環境がそろっていると言えそうである。

【陸産貝類】よく手入れされた里山に多くの種が生息することが知られており、普通の里山管理作業で陸産貝類の生息環境は向上する。南エリアとの確認種数に 3 倍以上の差があったことは、北エリアの管理が行き届いている為ではないか。

『生物多様性に富んだ森である』

【猛禽類】フクロウ、ノスリの繁殖が確認されている。特に樹洞でフクロウが繁殖するまでのプロセスでは多くの生物の関わりが必要である。

【陸産貝類】長野県内では 100 種ほどが知られている中で、27 種確認された。

『造成した池や水路周辺は、環境の多様さが最大になっている』

【トンボ類】調査 4 年目でも種数が増し、13 パターンの環境があることが分かった。また、本年度新たに 7 種が確認される一方、昨年度まで確認された 9 種が本年度確認されていない。調査者の考えでは、環境の多様度は最大まで達していると考えられている。

3 各事業報告

周辺地域におけるアフアの森の生態学的位置付け

本年度の調査からの考察を記します。

「北エリア」周辺には、フクロウの繁殖適地が少ないのではないか

フクロウの行動圏は4 km²との報告があり、ペア間の巣間距離は1~2 kmとの報告もあります。アフアの森「北エリア」の面積では生活の一部しか補えず、広く周辺環境を利用していると思われませんが、2年連続して「北エリア」で2ペアが繁殖したことは、アフアの森がフクロウの生息に適した環境だったことは確かであることがうかがえます。

一方で、昨年度同様に巣間距離が200m未満という稀な近さで行われたことは、アフアの森の周辺に繁殖に適した環境が無いことの表れとも考えられます。

地域に視野を広げても、アフアの森の水辺環境は多様

水生生物の調査では、周辺に存在する近似した環境と水生生物相を比較するために、事務所前の鳥居川でも調査を行なっています。

トンボ類に注目すると、今年度の調査全体で27種確認されているうち、27種全種がアフアの森で確認されていますが、鳥居川のみで確認された種が0種であったのに対し、アフアの森のみで確認された種は22種でした。また、双方で確認された種は5種でした。これはアフアの森の水辺環境の多様性を示すとともに、地域における水辺環境の保全・再生に対する役割の高さを示していると考えられます。この点については、カエル類の出現状況からも同様のことが言えます。

一方、他の水生生物相を比較しても、アフアの森と鳥居川の持つ環境要素は違うことがうかがえました。また、アフアの森の水辺環境はこれ以上違った環境の創出を期待できず、アフアの森だけが多様な環境を維持管理、創出しているだけでは地域の自然再生・保全は難しい。将来的には地域全体の自然環境、生物多様性を包括的に再生・保全していくことが重要である、ということを示してくれているものと考えています。

鳥居川は2009年8月に十数年ぶりに溢れるほどの増水により氾濫し、その河川状況は大きく変化し、その上河川復旧工事も入りました。調査から、増水・氾濫等による攪乱後もある程度生物相を維持・再生できる柔軟性を持った水辺環境であることが言えそうです。

3 各事業報告

(オ)人材育成事業

生き物から環境を知る視点を学ぶ : リコー「森の教室」

9月11～12日の1泊2日で「リコー森の教室」が実施されました。

リコー環境ボランティアリーダーが、アファンの森での研修を通して生物多様性保全活動の意義を理解し学ぶことで、地域での活動に役立てることを目的として行ないました。

内容は野外実習中心の研修となりました。

【主なプログラム内容】

生物の視点で環境をみる（知識・五感）

森の見方と保全方法（知識・技術の学び）

森の時間を考える（意識の向上）

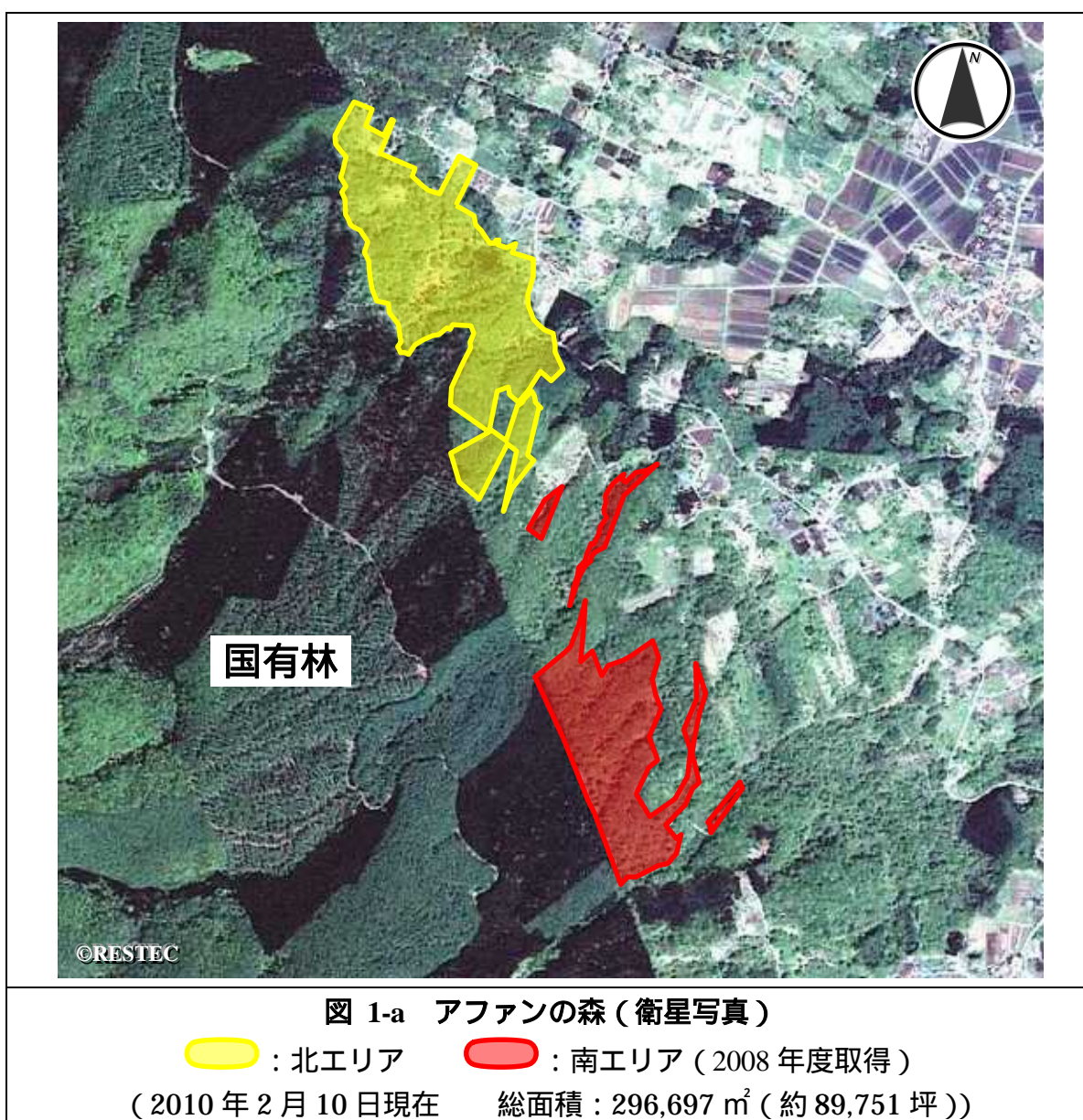
3 各種事業報告

(カ) トラスト活動

本年度の山林取得はありませんでした

前年度の報告以降（2009年2月以降）2010年2月10日現在までに、トラスト活動により取得した山林はありません。

現在のアフンの森（森林生態系のコアエリア）は、「北エリア」（これまで整備を進めてきたエリア）と、「南エリア」（2008年度に取得し、未整備の自然環境調査を実施しているエリア）の大きく2エリアに分かれ、総面積は約29.7haです。



3 各事業報告

(キ)心の再生事業

盲学校の子ども達がツリークライミング : アファン“心の森”プロジェクト

今年度は、児童養護施設の子供(4月、8月、9月、2泊3日3回)64名と盲学校に通う子供(5月、10月、1泊2日2回)18名、合計82名子どもたちが参加しました。

アファンの森での体験を通して、体全体を使って楽しむことで参加者の心が豊かになることを目標に行っています。10月の参加者には、ツリークライミングを体験してもらうなど新しい試みも行なわれました。

“心の森”プロジェクトを体験

アファン“心の森”プロジェクトを協働で行なっている、日本アムウェイ合同会社の社員の方々に、心の森の内容と効果をより理解していただくために行いました。

森での活動をとおして得られる効果を実際に体験していただきました。

今の自分を知る : 株式会社ディー・エヌ・エー 新人研修

株式会社ディー・エヌ・エー新入社員を対象に行なわれました。

作業体験、森林療法、アートセラピーを行なうことで、当財団と協同で行っている社会貢献活動「豊かな森の再生活動」をより理解していただきつつ、個々のコミュニケーション能力を高めることを目的に行いました。

(ク)国際交流事業

年次報告書の英訳版作成

毎事業年度に作成している冊子タイプの年次報告書「ANNUAL REPORT」の英訳を行ないました。これによって、姉妹森ウェールズアファン森林公園の関係者など多くの方々に、日本のアファンの森での活動をより一層詳しく知っていただくことができるようになりました。

また、理事長のC・Wニコルが7月にウェールズアファン森林公園を訪れ、今後の協力体制などについて意見交換を行ないました。

3 各事業報告

(ケ) 普及交流事業

地元の学校や長野県知事、そして海外の方も森を実体験

会員向けの見学会を5月～11月に14回行ない、ご支援いただいている森の様子を見て感じていただく機会としました。

また、幼稚園や大学、その他全国から同種活動を行っている団体や当団体の支援企業並びに社会貢献に関心のある企業等が多数訪れ、当団体の活動及び森林整備の意義を理解していただく機会としました。

長野県からは県知事、林務部、長野地方事務所林務課の方々が訪れ、今後の長野県の森林について意見交換を行ないました。

海外からも、生物多様性に関する教育をテーマに行なわれた「第6回アジア協力対話（ACD）環境教育推進対話」参加者（生物多様性・環境教育担当者）及び日米学生会議「環境と持続可能な発展」分科会のメンバーが森を訪れ、当団体の活動内容を伝えるとともに、国内外の事情について、意見交換を行ないました。

松木の指導で、学生が国有地の整備作業を実施

2003年からアファンの森に隣接する国有林（放置状態のスギ・カラマツ林）を、東京環境工科専門学校の生徒たちの体験活動・教育的利用の場所である「遊々の森」に設定を要請し、

「^{やまわら}山童の森」と名付け、当財団の松木氏指導により授業の一環として針広混交林へ変換する整備を実施しています。

2009年度は、放置されたスギ・カラマツ林にて9月に1クラス、10月に1クラス、11月に1クラスと3回にわたり、除伐・下草刈り作業が行われました。

社内への普及：実体感プログラムの実施

ご支援をいただいている、インテージ株式会社及び株式会社ディー・エヌ・エーの社員の方々が、それぞれに森を訪れました。森林再生の現場を見て、実際に作業を体験していただくことで、豊かな森の必要性を実感していただく場としました。

3 各事業報告

ブースの出展や、百貨店でイベント : 広報活動

アースデイ東京、エコプロダクツ 2009 にブース出展を行ないました。ポスターやパネル展示並びにプロジェクターを用いて財団の概要をわかりやすく伝えるとともに、新たに製作した、間伐材を利用したグッズ（後述）の販売も行いました。

また、伊勢丹新宿店及び伊勢丹吉祥寺店でも、当団体の活動紹介並びにグッズ販売などを行ないました。特に吉祥寺店では子供向けの展示に、理事長ニコルのお話会、アファンの森の生き物についてのワークショップやオークヴィレッジ協力によるマイ箸作り並びにアロマスプレー作りを行なうなど盛りだくさんの内容でした。

ホームページのリニューアル

ホームページの大幅なリニューアルを行ないました。全体のデザインを一掃し、より見やすく、よりわかりやすくなるよう考慮しました。今の森の状況がわかる「アファンの森は今」もほぼ毎日更新しています。

記念フォーラム「生き物のための森づくり」 開催

3月7日に神奈川県麻布大学大教室にて「学術記念フォーラム」を開催いたしました。今後アファンの森をより学術的な視点で評価し、また教育の場としても活動することを目的として、麻布大学と「学術交流協定」を結び、これを記念したフォーラム『生き物のための森づくり』を開催しました。先に会員の方のみを対象とした1年間の「報告会」を行なった後、一般の方もご覧いただけるフォーラムを開催し、約300名の方々にご来場いただきました。



フォーラム



調印式

3 各事業報告

(コ)その他の事業

アフアの森で「デザインの授業」 : バンタンデザイン研究所

バンタンデザイン研究所インテリアデザイン総合基礎科の学生が、10月5日～6日に研修旅行の一環として訪れました。

アフアの森の自然にふれることで、いつもと違う視点から「暮らしとデザイン」について考え学び、また、自然の中からデザインの原点を学びました。

【主なプログラム内容】

森林作業体験

講義：生き物の暮らしとデザイン

森の散策と観察

ナイトハイク（夜の森を感じる）

アフアセンター着工する

前年度より設計を進めてきました「アフアセンター」が2009年10月に着工しました。冬場は積雪のため工事は中断していますが、来春雪解けを待っての再開となります。



3 各事業報告

伐採した材を利用したアファンの森グッズの開発

オークヴィレッジ様の協力のもと、森を整備する際に伐採した材を使用したグッズの製作を行いました。内容はフォトフレームや箸、菜などです。数種類の材を使い、木目の違いなどが楽しめるものとなっています。

			
マイ箸	ハガキ	しおり	
			
フォトフレーム	ストラップ	キーホルダー	積み木

おわりに

下記の方々には、さまざまな形でご協力いただきました。（敬称略、五十音順）

新井浩司
石川啓吾
遠藤祐二
金子与止男
川崎公夫
神戸宇孝
鈴木忠和
鈴木常春
高槻成紀
堤勝彦
富田涼都
中村匡男
三森典彰
吉田寛

麻布大学野生動物学研究室の皆様
アフンの森財団のボランティアとしてご協力いただいた皆様
株式会社 アマゾンの皆様
有限会社 外谷建設の皆様
日本アムウェイディストリビューターのボランティアとして御協力いただいた皆様
株式会社 東海アクアノーツの皆様
のへら隊（グリーンセイバー有志）の皆様
人と自然の研究所の皆様
財団法人 リモート・センシング技術センター